

沖縄県内の油流出事例の発生状況

ガソリンや重油等の鉱油が環境中に流出すると、動植物への生育・生息環境に悪影響を与えるだけでなく、場合によっては火災の原因になることもあります。

当研究所では、年に3、4件の油流出事例に関する分析依頼があり、油種の特定や油由来の成分（ベンゼン、トルエン等）による水環境への汚染がないか分析しております。

【油種ごとの発生件数】

図1は、過去10年間で当研究所へ検査依頼があった油流出事例を油種ごとに集計したものです。油流出事例で、最も多かった油種は、ガソリンで、次にボイラーや船舶燃料に使用されるA重油でした。図中、油種が特定できず「不明」とされているものもありますが、これは採取した検体に含まれる油分が、検出できない程微量であったためです。また、他の原因で汚濁した水でも、はっきりと汚染原因が特定できない場合も油種については「不明」と判定されています。例えば、池や沼地などに発生したバクテリアを油膜と誤認する事なども、そうしたケースの一つです。

【調査対象区域ごとの発生件数】

図2は、過去10年の検査事例を調査対象区域ごとに集計したものです。「河川・排水路等」と「地下水・土壌」がともに14件となっており、「海域」が2件でした。

油流出による地下水汚染が発生した場合、河川や海域と異なり、直接汚染状況を視認することができないため、汚染範囲を把握や、流出源の特定が困難な場合が多く、調査が長期化する場合があります。そうしたことから、「地下水・土壌」で発生した14件のうち2件については、数年にわたっての調査が行われました。

【油流出事故を発見したら】

全ての事件・事故にいえることですが、油流出事故が発生した場合においても、早期の発見と迅速な対策が被害を最小限にする方策です。したがって、一般市民からの情報も災害を防ぐ有用な手

段となります。河川等で水面に油膜が見えるかどうかは油流出であるかの重要な判断基準ですが、鉱油独特の臭気がないかについても注意してください。人間の嗅覚というのは、優秀な“検出器”で、油膜もできないような微量な鉱油でも、その混入を検知することができます。ただ、個人の判断では難しいので、油流出が疑われる場合は、最寄りの市町村や保健所、消防等に相談して下さい。

【環境科学班】



写真 油流出事故の現場（右は採取された軽油）

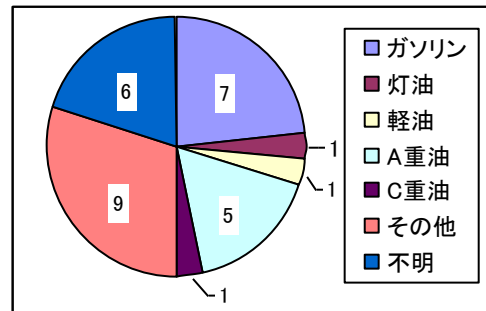


図1. 油種ごとの発生件数

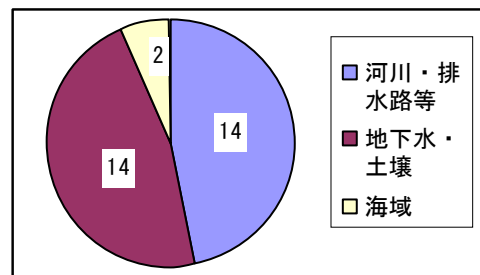


図2. 調査対象区域ごとの発生件数